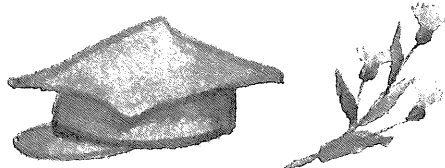


## 戦時体制下の入試(2)



名古屋大学教育学部教授

佐々木 享

## 爆撃と労務動員体制下の1945年度入試

第2次世界大戦の緒戦においては、日・独・伊の枢軸国側は奇襲攻撃によって優位にたつかに見えた。しかしその優位は早くも1943(昭和18)年には崩れ始めた。欧州戦線では、死闘の続いたスターリングラード(現在のレニングラード)は遂に陥落せず、逆に43年2月にはドイツ軍の敗退に終わり、ソ連軍が反撃に向かい始めた。イタリアでは7月にムッソリーニが失脚してバドリオ内閣が成立、9月には無条件降伏して早くも枢軸国の一角が崩壊した。

日本は、はてしなく拡大する戦線に大量の軍隊を投入し続け、軍需生産の拡充に狂奔した。こうした戦時体制の急転回のなかで、高等教育機関もまた矛盾のはざまにあった。一方では工業専門学校の増設、師範学校の専門学校への昇格、東京帝大への第二工学部増設などの拡充策が展開されたが、他方で学生・生徒の労務動員が始められ、大学・高校・専門学校の修業年限が短縮された。1943年にはついに在学生の徴兵猶予措置が停止され、同年12月1日には在学生が徴兵された(学徒出陣)。

1944(昭和19)年に入ると、太平洋戦線ではアメリカ軍がマーシャル群島、サイパン島をつ

ぎつぎに攻略し、欧州戦線では米英軍がノルマンジーに上陸、ドイツ軍は東西から挟撃されることとなった。

日本本土では、44年6月15日、中国の成都を発したB29爆撃機集団による最初の本土爆撃が行われた。東京には、11月1日にB29による偵察飛行があり、同24日には88機のB29爆撃機集団による最初の本格的爆撃が行われた。わが軍の防空体制はなすところを知らぬ有り様で、以後米空軍はほとんど自由に飛来するようになった。爆撃対象は東京だけでなく、全国の大都市に急速に広げられていった。高等教育機関の大部分は大都市にあったから、1945年の入試はいつ爆撃にあうかわからぬ状況下で実施された。たとえば横浜工業専門学校の入試の有り様は、次のように記されている。

戦争はいよいよ熾烈となり、本土空襲は絶え間なく続いた。〔中略〕2月9日一次発表、21日筆答試問、22日口頭試問、25日2部口頭試問とつづけられ、3月1日発表された。この間受験生は鉄かぶと、防空頭布、巻脚絆(きゃはん)に身をかためて学校へ集ってきた。学校側も大変であった。万一に備え試験問題なども甲乙丙3通り用意して金庫に入れたりした。(『横浜国立大学工

学部五十年史』279ページ)。

1945年度の入試の異常さは、爆撃の危険にさらされていたことだけではなかった。1944年には、大学・高専の学生はもとより、中学校・高等女学校等の上級生の大部分も労働動員の一環として、工場等に駆り出されていた。だから、学校ごとに多少は事情が異なっていたものの、多くの受験生は動員先から出願し、試験場に駆けつけた。試験問題も例年とは著しく違っていた。

異変はそれだけではなかった。戦局の苛烈化に対応した措置として、政府は45年4月から国民学校初等科を除くすべての学校の授業を原則として停止することとした。このためせっかく入試に合格しても、自宅待機させられたり、入学式が動員先の工場で行われ、入学と同時に工場に動員されたりしたものが大部分で、4月から授業を受けることができた者はむしろ稀であった。

#### 官・公・私立全校の入試期日の統一

1945年度の高専・専門学校等の入試は、基本的には、44年10月27日付文部次官通牒で出された「昭和二十年度高等専門学校入学選抜実施要項」に示された統一の方針に基づいて実施された。45年度入試は、いくつかの点で例年と異なっていたが、すべての学校の選抜方法を文部省が通牒で定めたこと自体が画期的なことであった。

著しい変更点の一つは、入試期日が3期に分けられ、すべての官立学校・私立高校の入試期日をそのいずれかに指定しただけでなく、公立および私立の大学予科・専門学校もこの3期のうちのいずれかに実施するものとしたことである。公立・私立の学校の入試期日が、3期中のいずれを選ぶかの選択幅はあったものの、文部省によって指定されたのは初めてのことであった。この措置によって、受験生は官・公・私立

校全体にわたって最大限3校しか受験できなかった(ただし、軍隊の学校は別)。文部省がこのような措置をとったのは、すでに通年動員されて生産に従事している生徒たちの動きを少なくするため——二段選抜を行う趣旨も同じ——であったが、この年には中等学校の修業年限短縮により4年生と5年生とが同時に卒業することも考慮したとされていた(『蛍雪時代』1945年4月号座談会における辻田力専門教育課長の説明)。

各校の試験期日は表の如くであった。官立高校、帝大・官立大予科などと同じ第1期校となったのは、私立大では慶応、早稲田(高等学院)、法政、日本、国学院の5大学の予科で、他の私立大予科はすべて第2期校となった。これら5大学と官立高校、帝大・官立大予科のかけもち受験はできなかったわけである。このほか、専門学校のうち、公立5校、私立6校、公立女専2校、私立女専12校が第1期校として試験を行った。

多くの私立大予科、公立・私立の専門学校は、官立専門学校、師範学校及び青年師範学校と同じ第2期校となった。

私学の入試期日を文部省が指定したことは前後に例を見ないから、この年の入試期日指定方式は国家統制を一段と強化した戦時色の典型の一つだったといえよう。

官公立高校の入試が1月に実施されたのも全く異例であった。

#### 全校で二段選抜、官立校は統一出題

1945年の入試では、さきの「実施要項」にしたがって、すべての学校で二段選抜が実施された。第1次試験では、出身学校長の調査書により定員の約2倍の者が選抜された。実業学校出身者の出願に学校長の推薦を要したことは前述の通りである。第2次試験は、1次試験合格者

表 1945年の高校・大学予科・専門学校等の入学者選抜の日程

	出願 期間	第一次銓衡 結果発表	第二次銓衡 施行	合格者 発表	通牒で指定された学校	
第1期	12.15 ↓ 12.24	1.11	1.23 ↓ 1.26	1.31	官公私立高等学校 高等師範学校 女子高等師範学校	帝大・官立大の予科全校、慶応、 法政、日本、国学院各大学の予科、 早稲田高等学院、公立専門学校5校、 私立専門学校6校、公立女子専門 学校2校、私立女子専門学校12校
第2期	1.10 ↓ 1.20	2.9	2.21 ↓ 2.24	3.1	官立専門学校、師範学校、 青年師範学校、東京農業教 育専門学校、官立実業専門 学校附設教員養成所5校	1期校となった大学を除く私立大学 の予科全校、公立専門学校20校、 私立専門学校31校、公立女子専門 学校10校、私立女子専門学校34校
第3期	2.8 ↓ 2.20	3.11	3.23 ↓ 3.26	3.31	臨時教員養成所、東京産 業大商業教員養成所、 官立実業専門学校附設教 員養成所7校	

『螢雪時代』1945年1月号による。

に対する身体検査、口答試問、筆答試問として実施され、それらを総合して合否が決定された。

全校が二段選抜を実施したことは、受験校を最大限3校に限定したこととあいまって、いつ空襲にあうかわからぬ状況下に移動する受験生数を少なくしたには違いないが、同時にそれは受験機会の減少を意味した。なお、朝鮮、「満州」、中国などの植民地在住者は、官立1期校については、現地で受験することができた。後述のように試験問題が統一されていたからこのような措置をとり得たのである。

従来実業専門学校に多かった無試験検定による選抜は、実施されなかった。

官立の高校・大学予科、専門学校、教員養成諸学校の筆答試問が文部省により統一して出題されたことも、この年の重要な特徴であった。このような統一出題方式は、20年以上前に官立高校で実施されたことがあったが、実業専門学校では例がなかった。

文部省の「実施要項」は筆答試問については、その趣旨を次のように説明していた。

筆答試問ハ学力ノ程度ヲ考査スル意味ニ非ズシテ高等専門教育（又ハ師範教育）ヲ受クルニ足ル素質、能力ノ有無ヲ察知スルヲ目的トシテ之ヲ行フモノトシ勤勞ニ従事スルコトノ長短が試問ノ結果ニ影響ヲ来タサザル様特ニ考慮スルコト

このような趣旨にそった出題が可能であったか否かは別として、長期にわたって工場や農村に動員されていた生徒たちの学力不足や不揃いは深刻な問題となっていたのである。

#### 出題に新形式登場

官立の高校・大学予科の筆答試験問題は、「其の一」「其の二」「其の三」の3つ（3科目ではない）に分けられ、1日で行われた。

「其の一」では、いずれも短かい問題が35題並べられていた（時間は一時間）。解答形式は、以下のようないわゆる多肢選択問題、関連事項を線で結ぶ問題、簡単な計算問題、いわゆる穴埋め問題などであった。（『螢雪時代』1945年3月号による）

- (1) 次の文の横線〔ここでは下線〕の言葉の中、文意上最も適当と思ふもの一つをえらび、その左側〔ここでは上〕に○をつけよ。

(例 浦島太郎は鰐、亀、鯛に乗って竜宮へ行った。)

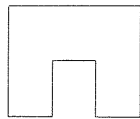
ビタミンBはレモン汁、米穀、肝油、野菜に多量に含まれてゐる。

- (3) 神皇正統記の著者は大安萬侶、賀茂真淵、北畠親房、菅原道真である。
- (5) 上方〔ここでは左側〕の群の言葉に最も関係深い言葉を下方〔ここでは右側〕からえらび夫々直線にて結べ。(11)まで同様)

(例 浦島太郎 — 犬  
桃太郎 — 亀  
金太郎 — 熊)

セメント	石油
アスファルト	石炭
コールタール	石灰石
エポナイト	ゴム

- |        |      |
|--------|------|
| (6) 茫然 | 驟雨到る |
| 敢然     | 自失す  |
| 巖然     | 命を下す |
| 沛然     | 難に赴く |
- (12) 簡単な振子の周期(T)は振子の長さ(L)の平方根に比例し、重力の加速度(g)の平方根に逆比例する。比例定数をKとしてこの法則を式で示せ。
- (16) 左〔ここでは下〕の図のやうな形の薄い板の重心は何処にあるか。凡その位置を図上に×印で示せ。



- (17) 次の諸施策の中、戦争に勝つために最も重要と思ふもの四つに○を付けよ。

大都市の人口疎開、防空体制の確立、闇取引の撲滅、食糧の増産、対外宣伝の強化、船舶の増産、犯罪の防止、航空機の増産

- (18) 左方の数字の間の関係を見出し、それに従って右方の□を充たせ。

(例 12 13 10 11 8 9 [6] [7])

3 9 7 49 47 □ □

- (22) 括弧の内に言葉が与へられてゐる時はその中から、与へられてゐない時は自分で考へて適当な言葉をえらんで次の文の□□を充たせ。(26)まで同様)(22)~(24)略)
- (25) 人間が体内に攝取した□は腎臓より□として、□□□より汗として、口鼻よりは呼□として排出される。

科目が明記されていたわけではないが、上の例に見られるように、およその見当はつく。筆者の分類では、国語8、国史4、地理3、数学4、物理2、化学4、生物4、常識(公民)6、となっていた。

「其の二」は作文で、題は「何事か又は何人かによりて感銘感動を受け、国民的自覚を深め、内面的成長飛躍をなし、或は人世の広き深きに眼の開きたる等の想ひ出あらば語れ。さはなくとも心中にある感謝、不満、決意、疑惑その他何にても魂の奥底よりの叫びを聴きたし。文体は自由、六百乃至八百字のこと。」というものであった。時間は1時間。

「其の三」は、「機械と動力」と題した2,600字程の小論を読ませ(一)本文の趣旨を二百字以内に要約せよ、(二)石油が動力源として石炭に勝る点を挙げよ、(三)我が国の機械と動力に就て感想を述べよ、というものであった。時間は90分。

すでに前年もそうであったように、外国語は出題されなかった。

こうして、「〇〇につき述べよ」式の従来の形式の出題は全く影をひそめた。代わって後に客観的とか新形式と呼ばれる出題形式が、ほかならぬこの大戦末期の入試に初めて登場したことは注目すべきことであった。後年、この年の入試問題は「戦後用いられた進学適性検査やアチーブメント・テストにきわめてよく似たものであった」といわれたのは（増田他『入学試験制度史研究』84ページ）、上記の「その一」をさしていたように思われる。採点が客観的に行われ得るという意味でのいわゆる客観式だけでなく、戦後の新制大学入試にみられる小論文を読ませる出題形式などが出ているという点でも、この年の入試は注目すべきものであった。

#### 徹底した国粹主義の登場

この年の官立専門学校、高等師範学校の入試問題も、官立高校のそれと似たような形式で出題された。しかし、官立専門学校と高師の出題の内容には、官立高校のそれには見られない国粹主義に凝り固まったものが目立った。

たとえば官立専門学校入試問題の「甲」（解答時間は1時間）にしめされた小論文はまず冒頭に明治天皇の御製を掲げ、「御歴代の天皇は我等臣民を赤子と思召され『おほみたから』として御いつくしみ遊ばされた」という文章で始まっている。そして「肇国以来の光輝ある国史の跡は、この君臣一体の精神の現われ」、「我が国の生産は皇国無窮の発展のための大御心に基づく大業の一端であり」、という調子の文章が続くのである。

「乙」の問題（80分）のなかには、「大東亜戦争に於いて日本精神が最もよく顕れてゐると思ふ事例を挙げ、それについて感銘した点を述べよ。（約二百字のこと）」という問題もふくま

れていた。

高等師範学校文科の出題は国粹主義的である点ではいっそう徹底していた。紙幅の制約もあるので、最初の5題だけ紹介しよう。

- (一) 天壤無窮の精神を拝し奉りて我が国体の萬邦に冠絶せる所以を述べよ。
- (二) 学徒勤労働員の趣旨を述べ併せて各自の勤労作業に依って得たる体験を述べよ。
- (三) 左の和歌を読み其大意と感想を述べよ。  
ふみわけよ 日本にはあらぬ 唐鳥の  
跡をみるのみ 人の道かは
- (四) 国史上に於ける復古の精神の顕現の著しきものにつきて述べよ。
- (五) わが国の特殊な地理的位置と国勢発展との関係につきて記せ。

このうち(一)と(二)は、高師の理科にも全く同文で出題されている。（官立専門学校、高等師範学校の出題内容は、『螢雪時代』1945年4月号によった。）

官立高校の出題のなかにも、作文問題のように国粹主義的傾向のものがふくまれてはいたが、この専門学校や高師の問題のようにいわばむき出しのものではなかった。その学校で教育を完結させることを予定している専門学校や高師の受験生にはより国粹主義的であることを求め、さらに帝大・官立大の学部に進むことが予定されている高校・大学予科の受験生には国粹主義よりは合理主義的であることをより多く求めたということなのだろうか。そうだとすれば、出題した文部省は著しく差別的な方針をもっていたことになる。

客観主義の出題形式と国粹主義とが併存しているところに、大戦末期という断末魔の矛盾が露呈していたといえよう。